

野々市市

# 末松信濃館跡

金沢市

# 戸水ホコダ遺跡

2018

石川県教育委員会

(公財)石川県埋蔵文化財センター

す え ま つ し な の や か た あ と  
末松信濃館跡

と み ず  
戸水ホコダ遺跡

2018

石 川 県 教 育 委 員 会  
(公財) 石川県埋蔵文化財センター

## 例 言

- 1 本書は末松信濃館跡と戸水ホコダ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、末松信濃館跡が野々市市清金1丁目地内、戸水ホコダ遺跡が金沢市鞍月5丁目地内である。
- 3 調査原因は、石川県水道用水供給事業であり、同事業を所管する石川県土木部水道企業課が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成26(2014)年度に戸水ホコダ遺跡、平成27(2015)年度に末松信濃館跡の現地調査を実施した。平成27・29(2017)年度に出土品整理を実施し、平成29年度に報告書作成・刊行を行った。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部水道企業課が負担した。
- 6 現地調査の期間・面積・担当(当時)は下記のとおりである。

### 戸水ホコダ遺跡

期間 平成26年11月11日～同年12月15日

面積 240㎡

担当 調査部特定事業調査グループ

水田勝(専門員) 岩瀬由美(専門員)

### 末松信濃館跡

期間 平成27年12月1日～同年12月21日

面積 120㎡

担当 調査部特定調査事業グループ

岩瀬由美(専門員) 関晃史(嘱託調査員)

- 7 出土品整理は平成27・29年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 8 報告書の作成は平成29年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は佐々木華子が行った。  
末松信濃館跡 加藤江莉(調査部特定事業調査グループ嘱託調査員)  
戸水ホコダ遺跡 佐々木華子(調査部関係調査グループ嘱託調査員)
- 9 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 調査には下記の機関の協力を得た。(五十音順)  
石川県土木部水道企業課、金沢市教育委員会、金沢市花と緑の課、株式会社高田組、沢田工業株式会社、野々市市教育委員会
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
  - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海面標高)による。
  - (3) 遺構の名称は、下記の略記号に番号(算用数字)を付し表記した。  
SD:溝、SK:土坑、P:柱穴・小穴
  - (4) 遺物番号は挿図・観察表・図版で対応する。
  - (5) 遺物実測図は、須恵器は断面黒塗り、その他は白抜きとした。

# 目 次

## 第1章 末松信濃館跡

第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	2
第3節 調査の成果	6
第4節 ま と め	10

## 第2章 戸水ホコダ遺跡

第1節 調査の経緯と経過	11
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	13
第3節 調査の成果	16
第4節 ま と め	21

## 報告書抄録

### 挿 図 目 次

末松信濃館跡	戸水ホコダ遺跡
第1図 遺跡の位置	第9図 調査区位置図
第2図 周辺の遺跡	第10図 遺跡の位置
第3図 南壁基本土層	第11図 周辺の遺跡
第4図 調査区平面図西半部	第12図 調査区全体図
第5図 調査区平面図東半部	第13図 基本土層・遺構断面図
第6図 遺構平面図・断面図	第14図 東側調査区出土遺物実測図
第7図 遺物実測図	第15図 東側調査区出土木製品実測図
第8図 末松信濃館跡・清金アガトウ遺跡 調査区位置図	第16図 戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡 位置関係略図
10	22

### 表 目 次

第1表 末松信濃館跡調査・整理体制	1	第4表 戸水ホコダ遺跡周辺の遺跡	15
第2表 末松信濃館跡周辺の遺跡一覧	4	第5表 戸水ホコダ遺跡出土遺物観察表	19
第3表 戸水ホコダ遺跡調査・整理体制	11	第6表 戸水ホコダ遺跡出土木製品観察表	20

### 図 版 目 次

図版1 末松信濃館跡遠景	図版5～8 戸水ホコダ遺跡遺構・遺物
図版2～4 末松信濃館跡遺構・遺物	

# 第1章 末松信濃館跡

## 第1節 調査の経緯と経過

### 1. 調査の経緯と経過

末松信濃館跡の発掘調査は、石川県土木部水道企業課（以下、水道企業課）による送水管埋設工事に係るものである。工事予定区画内に周知の遺跡である末松信濃館跡があり、平成27（2015）年3月31日に水道企業課から石川県教育委員会（以下、県教委）に面積120㎡部分の発掘通知が提出され、平成27年度に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査に先立ち、県教委文化財課（以下、文化財課）、水道企業課及び公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）の三者による現地打ち合わせが11月16日に行われた。事務所や駐車場、掘削排土などの作業ヤードの確認と、アスファルト切断及び復旧工事についての確認を行った。調査予定地については、当初幅2.3mでアスファルトの切断を行い、調査を実施する予定であったが遺構面までの深さが約1.5mと見込まれたため、安全勾配を確保しての掘削が必要と判断し、アスファルトの切断を3m幅で行うこととなった。

調査に際して、市道の通行止め措置が必要となるため、野々市市への道路占有許可手続きや、地元町会への説明は一括して事業者が行うことを確認した。

11月16日に県教委からの依頼を受けて、県埋文センターが発掘調査を実施するに至った。12月1日から西半部の表土掘削を行った。調査区が狭小であるために調査は速やかに進んだ。同3日から西半部の遺構検出及び掘削を行い、同7日に西半部の遺構掘削が完了した。続いて、同8日から東半部の表土除去を行い、同9日から同14日に遺構検出及び遺構掘削を完了した。調査区の埋め戻しは、同14日に行った。県埋文センターは、12月21日付で文化財課に現地調査完了届を提出した。

### 2. 整理作業等の経過

出土品整理、報告書作成・刊行は事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として県埋文センターが実施し、特定事業調査グループが担当した。出土品整理及び報告書作成・刊行は平成29年度に行った。出土品整理に関しては、遺物の記名・分類・接合・実測・トレースである。報告書については、16項の原稿を作成し、報告書編集から刊行までを行った。

第1表 調査・整理体制

	調査体制	整理体制
業務内容	発掘調査	出土品整理・報告書作成・刊行
調査・整理年度	平成27年度	平成29年度
調査・整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 田中 新太郎)
総括	柴田 政秋(専務理事)	柴田 政秋(専務理事)
事務	釜親 利雄(事務局長)	釜親 利雄(事務局長)
	長嶋 誠(総務グループリーダー)	横山 謙一(総務グループリーダー)
調査・整理	福島 正実(所長)	藤田 邦雄(所長)
	藤田 邦雄(調査部部长)	垣内 光次郎(調査部部长)
	川畑 誠(特定事業調査グループリーダー)	松山 和彦(特定事業調査グループリーダー)
担当	岩瀬 由美(特定事業調査グループ専門員)	特定事業調査グループ
	関 晃史(特定事業調査グループ嘱託調査員)	

## 第2節 遺跡の位置と歴史的環境

### 1. 地理的環境

末松信濃館跡は、野々市市清金一丁目地内に位置する。野々市市は、石川県のほぼ中央に位置し、市域は県下最大の河川である手取川によって形成された手取川扇状地の北東端にあたる扇中央部から扇端部を占めている。手取川は、石川県、福井県、岐阜県の三県の境界にそびえる白山に源を発する1級河川である。手取川扇状地は、河川の下流域に形成され、白山市鶴来を扇頂として展開度約120度、扇形約12kmを有する。古来より手取川は洪水や氾濫等によって流路を何度も変えつつ、枝分かれした中小河川が形成され扇状地を貫流している。そのため、遺跡が立地する微高地は中小河川に挟まれるような形で、扇頂部から扇端部にかけて細長い島状地形を形成していることが、これまでの発掘調査成果により明らかにされている。



第1図 遺跡の位置

### 2. 歴史的環境

野々市市末松地区には、末松廃寺を中心として末松遺跡、末松B遺跡、末松C遺跡、末松ダイカン遺跡、末松しりわん遺跡、末松福正寺遺跡、末松古墳、末松信濃館跡、大館館跡、法福寺跡、末松砦跡等の多くの遺跡が緻密に分布していることから、末松遺跡群として総称されている。総じて縄文時代後期～近世にわたる複合遺跡として周知されている。発掘調査成果からは、地域史を考える上で重要な遺跡も多く存在し、基礎的なデータが日々備蓄されつつあるなか、さらに、近年相次ぐ土地区画整理事業等で遺跡数が増加し、これまでに確認されていなかった時代の遺構や遺物が多数確認されている。

縄文時代では、御経塚地区に所在する国指定史跡御経塚遺跡や御経塚シンデン遺跡で後期中葉から晩期に営まれた集落が確認されているが、当該地区で縄文時代における人々の土地利用が行われた形跡を示す遺構は確認されていない。しかし、末松廃寺では磨製石斧、石鏃が出土し、末松ダイカン遺跡からは晩期にあたる条痕文の深鉢が散発的に出土している。本遺跡の約2km東に位置する栗田遺跡では、晩期の打製石斧製作跡が確認されている。また、白山市乾遺跡では、配石遺構や集石遺構が検出されている。さらに墓域や居住跡に伴うと考えられる埋設土器が確認されているため、周辺に同時期の遺跡が立地していた可能性が考えられる。

弥生時代では、扇端部や扇中央部において前期から中期の集落遺跡が少ない。本遺跡周辺では、栗田遺跡から遠賀川式土器が数点出土しているが、遺構は伴っていない。また、続く柴山出村式土器は上林遺跡や末松遺跡、遺構を伴う乾遺跡での出土事例はあるが、住居などの明瞭な遺構を伴って出土しているわけではないため、定住などの痕跡は確認されていない。後期後半になると、扇中央部周辺においても遺跡数が増加する傾向が見られる。上新庄ニシウラ遺跡、末松廃寺、上二口遺跡などで竪穴建物や掘立柱建物が確認されている。この内、上新庄ニシウラ遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代



初頭にかけての竪穴建物4棟、掘立柱建物2棟が確認されている。集落が増加したといえども、扇端部や沖積地と比べれば圧倒的に集落遺跡は少ないことは明らかである。

古墳時代になると、市内では御経塚シンデン古墳群や二日市イシバチ遺跡などの大規模な集落の近隣もしくは同じ場所に、前方後方墳や方墳を主体とした古墳群が築かれるようになる。末松地区周辺の扇中央部では近年、新たな発掘調査成果がもたらされ古墳時代前期の動向が明らかにされつつあるが、こちらは詳細な報告を待ちたい。現在までに分かっているのは、木津遺跡や末松A遺跡で竪穴建物が確認されている。また、同時期の古墳としては上林古墳と詳細不明の末松古墳だけである。

一方、7世紀後半の白鳳時代になると末松廃寺が創建される。手取川扇状地の扇中央部に営まれた末松廃寺は、江戸時代からその存在が知られている。古代寺院として考古学的に認識されたのは、大正10(1921)年の上田三平による調査である。上田の調査結果は後の末松廃寺の保存と史跡指定にとって有効な基礎資料となり昭和14(1939)年に国史跡に指定された。末松廃寺はこれまでの発掘調査成果から、当該期の金堂、塔跡、築地が確認されている。これらの成果をまとめると、東西幅80mの寺域に、1辺13mの塔と東西20m、南北16.5mの金堂が東西に並ぶ、法起寺式の伽藍配置をもつ白鳳寺院であることが明らかになっている。創建時の伽藍は、8世紀第3四半期で一度廃絶していることが判明しており、その後9世紀第4四半期に創建時の基壇の上に建てられた掘立柱建物からなる寺院となり、11世紀まで存続した寺院であることが確認されている。

一方で、末松地区を含む周辺の遺跡では7世紀初頭から扇中央部へ進出をはじめ、集落を形成し始める。7世紀初頭から前半代の遺構としては、上林新庄遺跡で竪穴建物5棟とわずかに土坑がある。5棟のうち1棟は、被災住居で横瓶や平瓶などの祭器の出土が目立つことから、特殊な機能を有していた住居であることが指摘されている。また、末松ダイカン遺跡でも同時期の竪穴建物が確認されているが、遺構・遺物共に非常に少ないことが、既往の調査から確認されている。

7世紀後半以降になると末松廃寺の創建と同時に周辺の集落が規模を急速に拡大し、末松廃寺を取り囲むようにして立地をするようになる。末松廃寺の東側に位置する多くの遺跡は、上述したとおり末松遺跡群と総称されている。中でも、末松遺跡では竪穴建物や掘立柱建物、土坑などが確認されている。遺跡としては、7世紀後半から9世紀前半まで続くことが確認され、盛期は8世紀前半の第1四半期と考えられている。さらに末松ダイカン遺跡では、末松遺跡と同様に竪穴建物や掘立柱建物などの多くの遺構が確認されている。遺跡群の中でも中心的な遺跡と考えられ、7世紀前半から10世紀前半まで集落が存続することが知られている。また、末松遺跡群から東に位置する上林・新庄遺跡群においても末松遺跡群と同時期の集落が形成されている。上林・新庄遺跡群は、下新庄アラチ遺跡、下新庄タナカダ遺跡、上林新庄遺跡、上林テラダ遺跡、上新庄ニシウラ遺跡の5遺跡で構成されている。7世紀初頭にかけて上林新庄遺跡の西半と上林テラダ遺跡を含むエリアに初めて集落が誕生し、続く7世紀後半から8世紀初頭にかけて急速に集落が拡大し、それ以降は下新庄アラチ遺跡周辺を含む北エリアと上新庄ニシウラ遺跡を中心とする南エリアにわけられる。北エリアについては、集落形成時から大型建物を中心に、区画溝や計画的に配置された倉庫群や副屋から集落全体の組織力の高さと主導する権力の存在が指摘されている。また、北エリアの南端には長大な掘立柱建物が確認されており、遺構周辺の出土遺物には鉄鉢等の仏器が含まれていることから、この地に仏教が取り入れられていたことが推測されている。南エリアについては、竪穴建物を中心とし、周囲を掘立柱建物を取り囲むような配置をみせている。竪穴建物の周辺には長方形の土坑が伴い、覆土からは韃の羽口や鉄滓、刀子状もしくは釘状鉄製品が出土している。また、製鉄炉かと考えられる土坑も確認されており、このエリアは製鉄従事者集団の居住区であった可能性が考えられている。

両遺跡群とも、9世紀半ば以降急速に衰退していく。その後の集落は、白山市安養寺遺跡などの別の微高地に移動し、新たな集落が形成される。

中世の集落に関しては、中世前半については近隣の発掘調査をみても遺物の散布や包含層での出土は一定程度あるものの、遺構を伴う明確な例は少ない。このような中、市域では14世紀ごろから遺構が確認され始める。加賀国司であった富樫氏の館跡内堀の調査や扇が丘ハイゴク遺跡で加賀地方でも最大級の規模となる8×6間の大型掘立柱建物が確認されている。本遺跡周辺では、13世紀代の清金アガトウ遺跡や栗田遺跡や三納トヘイダゴシ遺跡などで小宅が散在する事例が確認されている。これらの事例から推測するに散居村的な集落景観が展開していたのであろう。また、白山市三浦・幸明遺跡や橋爪ガンノアナ遺跡などで陶磁器類が出土しており、開発領主クラスの居館として推測されている。遺跡地図上では、城館跡や砦跡が散発的に見られるが、実体は不明である。今後行われる調査に期待したい。

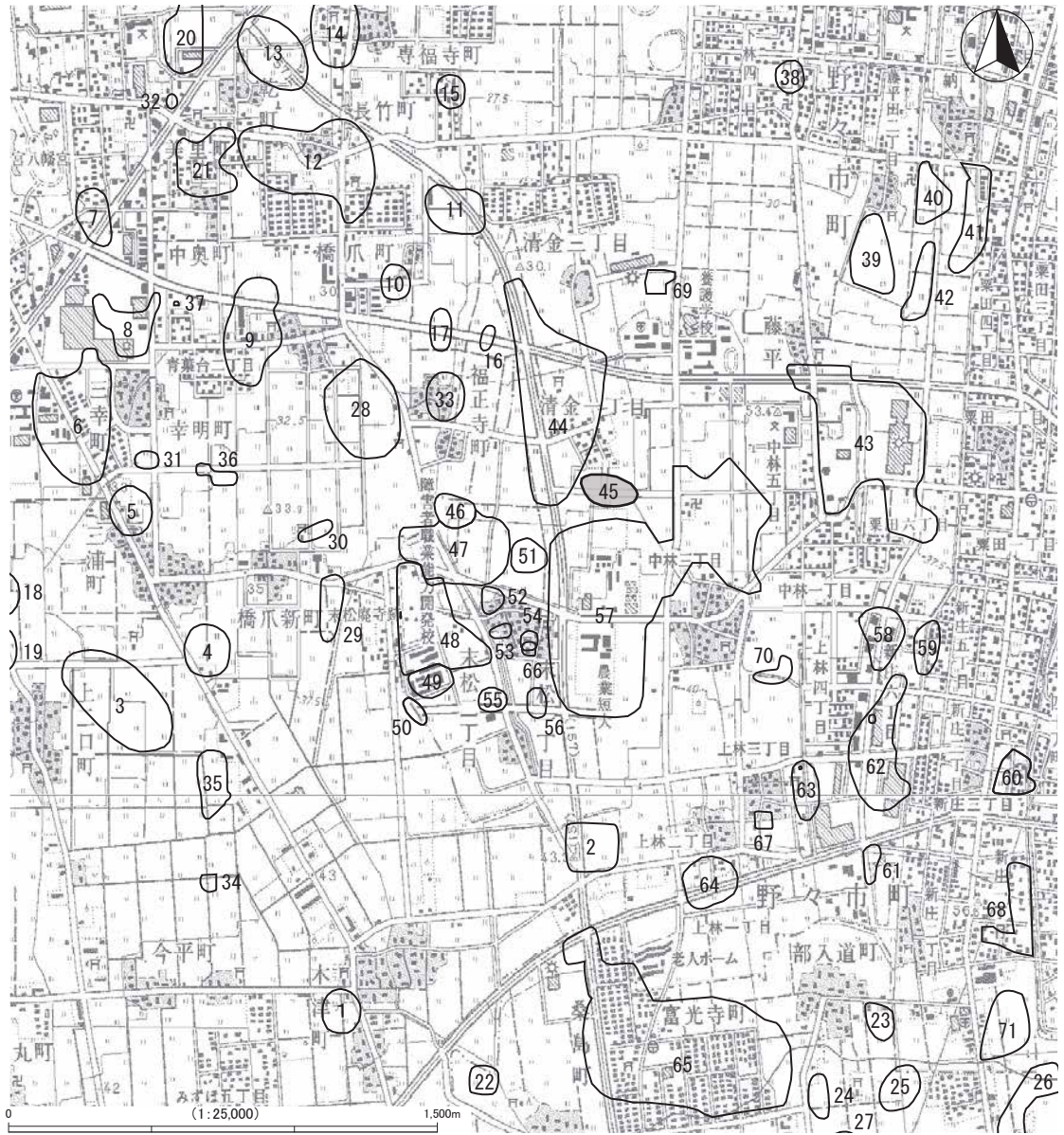
引用・参考文献

坪井清足・吉岡康暢ほか 2009 『史跡 末松廃寺跡』 文化庁記念物課埋蔵文化財部門  
 野々市町史編纂専門委員会・野々市町 2006 『野々市町史』 通史編  
 野々市町・野々市町教育委員会 2009 「石川平野の開拓史－縄文から中世まで－」  
 『ふるさと歴史シンポジウム いまよみがえる末松廃寺』  
 本田秀生・土屋宣雄ほか 2000 『野々市町 末松遺跡群』 財団法人 石川県埋蔵文化財センター  
 望月精司 2009 「手取扇状地における飛鳥時代の移民集落」『ふるさと歴史シンポジウム いまよみがえる末松廃寺』  
 野々市町・野々市町教育委員会  
 横山貴広 1998 『上新庄ニシウラ遺跡』 野々市町教育委員会

第2表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡番号	遺跡名	時代	No.	遺跡番号	遺跡名	時代
1	901100	法連寺遺跡	不詳	38	1203800	三林館跡	安土・桃山
2	901200	木津遺跡	弥生、古墳、古代、中世	39	1203900	藤平田ナカシギ遺跡	中世
3	903100	上二口遺跡	古墳、奈良、平安	40	1204000	三納トヘイダゴシ遺跡	平安、中世
4	903200	三浦高麗野遺跡	中世	41	1204100	三納アラミヤ遺跡	奈良、平安
5	903300	三浦常在光寺跡	中世	42	1204200	三納ニシヨサ遺跡	中世
6	903400	三浦・幸明遺跡	古墳、古代、中世	43	1204300	栗田遺跡	縄文、奈良、平安、中世、近世
7	903700	幸明経塚	近世	44	1204400	清水アガトウ遺跡	縄文、奈良、平安、中世、近世
8	903900	幸明遺跡	奈良、平安	45	1204500	末松信濃館跡	古代、中世
9	904100	橋爪ガンノアナ遺跡	奈良、平安	46	1204600	福正寺遺跡	中世
10	904200	橋爪松の木遺跡	中世	47	1204800	末松ダイカン遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世
11	904300	橋爪遺跡	縄文、弥生、中世、近世	48	1204900	末松廃寺跡	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
12	904400	長竹遺跡	縄文、弥生、古墳、中世	49	1205000	大館館跡	平安、中世
13	904500	乾遺跡	縄文、弥生、古代、中世、近世	50	1205100 904000	末松砦跡	城館（不詳）
14	904600	専福寺遺跡	中世	51	1205200	末松B遺跡	弥生、平安
15	904700	高田遺跡	縄文	52	1205300	吉元堂遺跡	城館（不詳）
16	914701	福正寺ゴコモマチ遺跡	古墳	53	1205400	末松C遺跡	奈良、平安
17	914702	福正寺ゴコモマチ遺跡	古墳	54	1205500	末松古墳	古墳
18	914800	上二口B遺跡	古墳	55	1205600	法福寺遺跡	中世
19	914900	上二口C遺跡	古代	56	1205700	末松しりわん遺跡	奈良、中世、平安
20	915000	乾町三月田遺跡	古墳、古代	57	1205800	末松遺跡	飛鳥、奈良、平安
21	915100	中興・長竹遺跡	弥生、古墳、奈良、平安、中世	58	1205900	下新庄アラチ遺跡	古墳、奈良、平安
22	916900	安養寺念仏林遺跡	中世	59	1206000	下新庄タナカダ遺跡	奈良、平安
23	917300	部入道A遺跡	奈良、平安	60	1206100	下新庄フルナワシロ遺跡	弥生、奈良、平安
24	917400	部入道B遺跡	奈良、平安	61	1206200	上新庄ニシウラ遺跡	弥生、古墳、奈良、平安
25	917500	部入道C遺跡	奈良、平安	62	1206300	上林新庄遺跡	縄文、古墳、奈良、平安、中世
26	917800	熱野遺跡	平安、中世	63	1206500	上林テラダ遺跡	奈良
27	917900	新荒屋遺跡	古墳	64	1206600	上林遺跡	弥生、平安
28	934500	橋爪B遺跡	弥生、古墳、奈良、平安、中世	65	1206700 916600	安養寺遺跡	弥生、奈良、平安
29	934400	橋爪新A遺跡	弥生～中世	66	1207100	末松館跡	城館（不詳）
30	934500	橋爪新B遺跡	平安	67	1207400	上林キドグチ遺跡	（不詳）
31	934600	幸明おとまる田遺跡	弥生、奈良、平安	68	1207500	新庄カキノキダ遺跡	古墳、中世
32	934800	乾九千寺田遺跡	古代、中世	69	1207700	下林バンジョウアケ遺跡	古代、中世
33	935000	福正寺シンキョウ遺跡	中世	70	1207800	上林イシガネ遺跡	古代
34	936700	今平比遺跡	古代	71	1208100	上新庄チャンバチ遺跡	古墳
35	936800	三浦キザ山遺跡	古代				
36	937100	三浦ゲンショウ遺跡	古代				
37	937500	中興ロクジュウカリ遺跡	古代				





(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(松任)を合成)

第2図 周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

## 第3節 調査の成果

### 1. 調査の概要

調査区は、面積が120㎡の狭小の調査区であり、西半部、東半部と呼称して調査を実施した(第5・6図)。また、公共座標(世界測地系)に基づく10m間隔のグリッドを業者委託によって設置した。遺構図面については、平面図を業者委託によって作成し、断面図については県埋文センターが作成を行った。

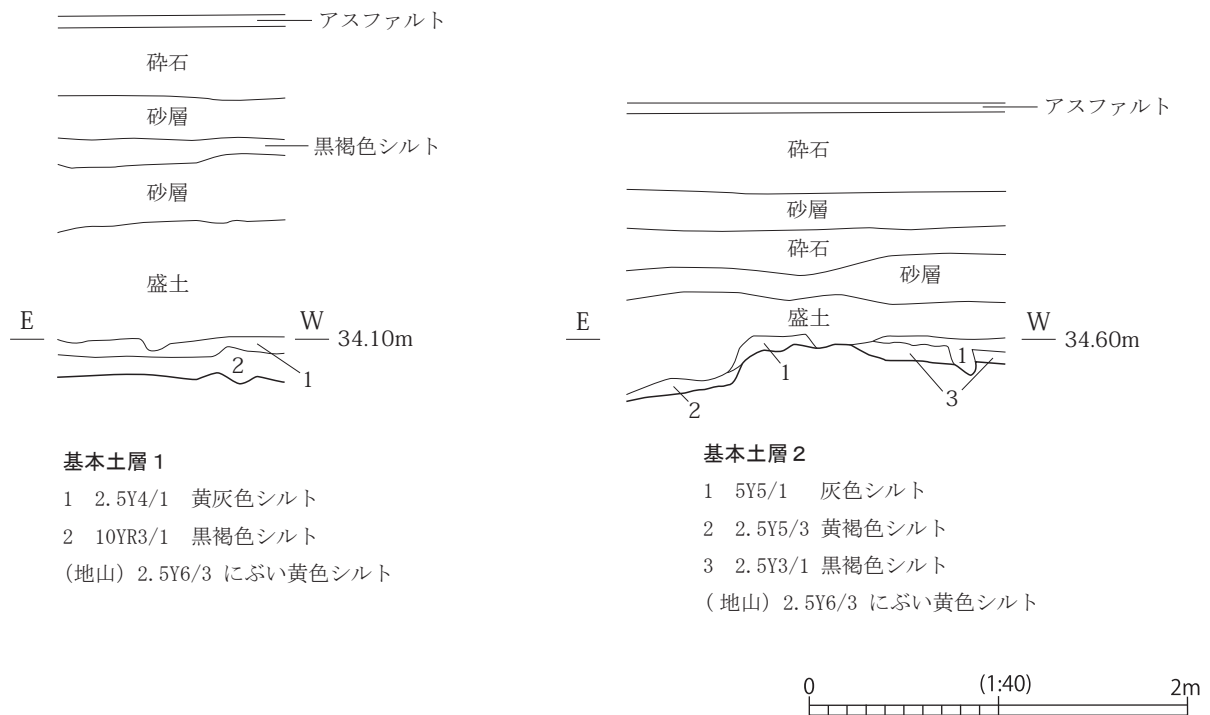
調査の結果、遺跡は標高35.8m～36mに立地し、西に向かって緩やかに下がる地形を呈する。遺構検出面は、標高34m～34.5m前後を測る。遺構は極めて希薄であるが、僅かに溝、ピット、鞍部を検出した。出土遺物は、古代の須恵器・土師器の小片が多くを占める。遺構の希薄さから、遺跡の縁辺部である可能性が高い。

### 2. 基本層序

調査区からは、南壁2地点より土層断面図を作成し、土層柱状図を作成した(第3図)。上層は共通して、アスファルト及び砕石、砂層が続き、現代瓦などが混ざる盛土で構成される。

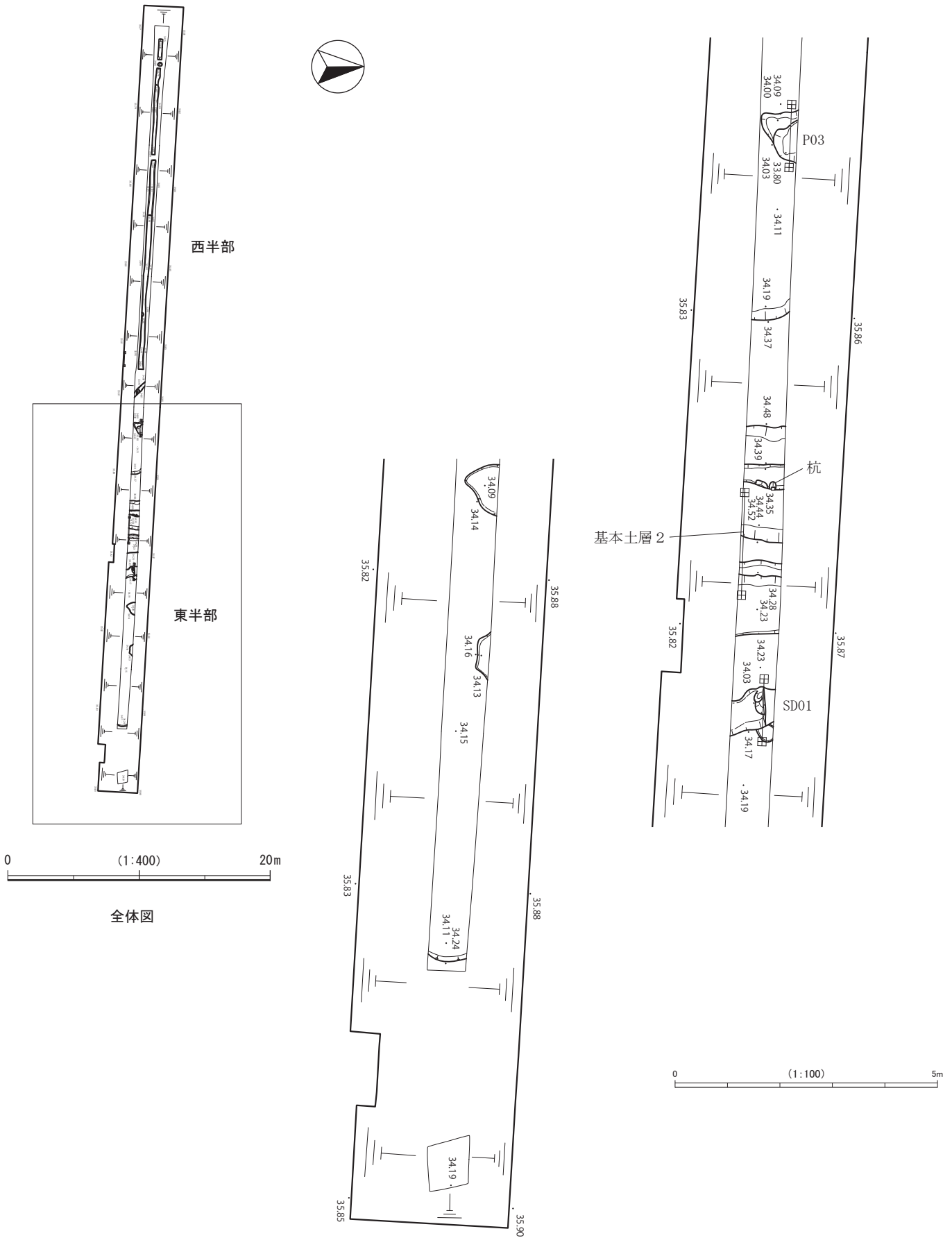
基本土層1では、盛土に続いて第1層黄灰色シルト、第2層黒褐色シルトであるが下層に地山が少量混ざるため地山との境が不明瞭な部分が見受けられた。第2層は、厚さ18cm前後の遺物包含層である。

基本土層2では、第1層灰色シルト、第2層黄褐色シルト、第三層黒褐色シルトで構成される。第1層及び第3層は、旧耕作土と考えられ、第2層は地山に近い土質のため整地土として考えられる。地山は、共通してにぶい黄色シルトを呈する。



第3図 南壁基本土層(S = 1/40)





第5図 調査区平面図東半部 (S = 1/100 · 1/400)

### 3. 遺 構

#### SD01(第5図)

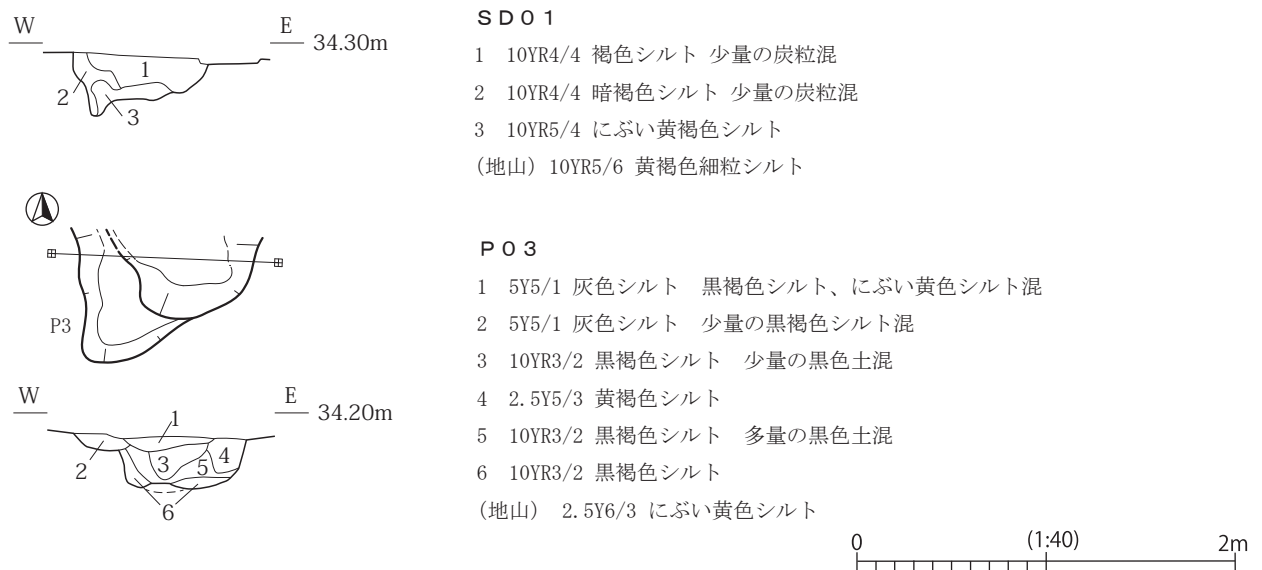
調査区東半部の中央に位置する南北にのびる溝である。幅74cm、調査区内で検出できた延長は約80cmである。北西部が僅かにくぼむが、比較的浅い溝である。東端の肩部分は攪乱に切られ削平を受けている。第1層褐色シルト層から遺物が少数出土しているが、小片が多く図化したものはない。

#### P03(第5・7図)

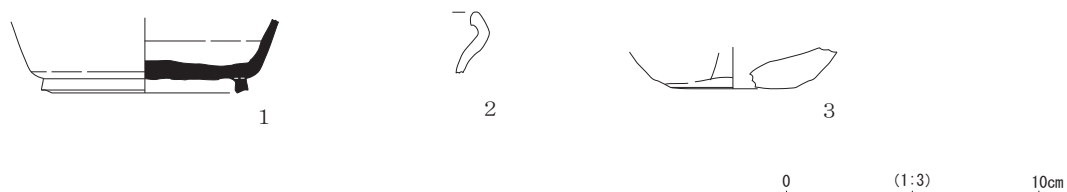
調査区東半部の西端に位置する。東西70cm、南北50cm、深さ47cmの円形状のピットである。西側的一部分は、攪乱に切られる。柱痕跡の可能性ある第3層は、黒褐色シルトに地山のブロックが僅かに混ざる土質である。掘方は、黄褐色及び黒褐色シルトであり全体的に地山ブロックが少量混ざる。

### 4. 遺 物

本調査中に出土した遺物は、総数約70点である。そのうち、図化したものは3点である(第7図)。1は、表土除去作業中に出土した須恵器有台杯である。高台がやや外反し、内外面に自然釉がかかる。2は、包含層より出土した土師器長胴甕の口縁部である。小片のため、口径は不明である。3は、遺構検出時に出土した土師器甕の底部と思われる。これら3点の資料は、奈良時代から平安時代の資料に比定される。



第6図 遺構平面図・断面図(S=1/40)



第7図 遺物実測図(S=1/3)



## 第4節 ま と め

調査では、調査区西半部で包含層の堆積を確認し、西側へ落ち込む鞍部を検出した。また、東半部で古代のピットと時期不詳の溝を検出した。

今回の調査区の東端から約1m離れた地点で過去に末松信濃館跡の調査を行っている（本田・安2000）。当時の調査では、Aトレンチにおいて旧流路と時期不詳の溝、不整形な落ち込みが確認されている。

小穴も確認されているが、柱穴かは不明である。出土遺物は、古代の遺物が中心であるが、越前の播り鉢などの中世の遺物も散発的に見られる。

また、本調査の西端から約400m離れた地点では、上述した調査と同時期に清金アガトウ遺跡の調査が行われた。Aトレンチでは6号土坑と呼ばれる不整形な落ち込みと小穴が確認されているのみで、遺構は希薄であることが確認されている。また、地形的にも東に向かって緩く傾斜していることが発掘調査により判明している。

過去の調査や周辺の遺跡も含めて検討を行うと、末松信濃館跡の東側には旧河道や小穴がわずかに確認できるが、集落が広がっている様子は確認できない。しかし、北東側に向かって地形がやや高くなり、遺構もわずかに増加しているため集落の本体は現在の集落下の可能性がある。また、西側には清金アガトウ遺跡が展開しており竪穴建物や掘立柱建物などの多数の遺構が確認されている。こうしたことから、本調査区西端で検出した鞍部は、遺跡想定範囲の西端部に位置し西側に展開する7世紀から10世紀の集落跡である清金アガトウ遺跡と本遺跡を隔てる地形の痕跡である可能性が高く、また、遺跡の縁辺部と思われる。狭小な調査区である上に、出土した遺物がごく少量で遺跡の様相は判断しがたいが、清金アガトウ遺跡と同時期の小規模な集落が形成されていた可能性も考えられる。



(本田・安2000「平成8年度清金アガトウ遺跡・末松信濃館跡調査区位置図」より一部改変)

第8図 末松信濃館跡・清金アガトウ遺跡調査区位置図(1/2,500)



## 第2章 戸水ホコダ遺跡

### 第1節 調査の経緯と経過

#### 1. 調査の経緯と経過

戸水ホコダ遺跡の発掘調査は、石川県土木部水道企業課(以下、水道企業課)による石川県水道用水供給事業を要因とする。工事予定区画内に周知の遺跡である戸水ホコダ遺跡があり、平成26年4月1日に水道企業課が石川県教育委員会へ発掘調査を依頼した。10月2日の石川県教育委員会文化財課(以下、文化財課)と水道企業課の現地打ち合わせの際、水道企業課から文化財課へ工事内容の変更が伝えられ、両課の協議・調整の結果、調査面積が当初予定していた400㎡から240㎡に変更となった。その後、10月24日に文化財課からの依頼を受けて、公益財団法人石川県埋蔵文化財センター(以下、埋文センター)が発掘調査を実施するに至った。

#### 2. 調査の経過

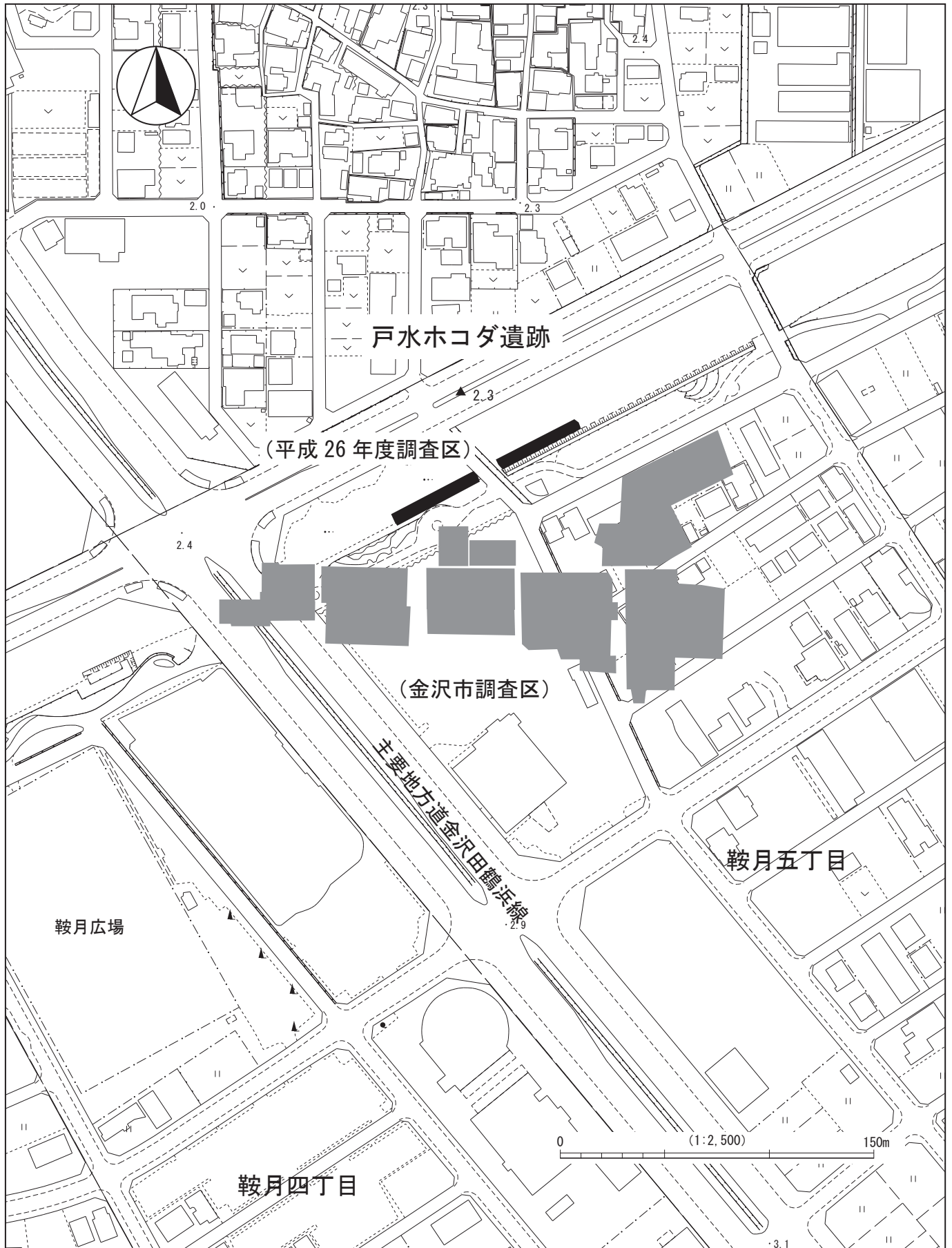
文化財課は平成26年10月24日付で埋文センターに発掘調査を委託した。面積は240㎡である。調査は11月11～12日に西側調査区の、同13～14日に東側調査区の表土除去を行った後、西側調査区から調査を開始した。西側調査区では同19日に遺構検出を始め、同27日に遺構掘削を完了し、同28日に埋め戻しを行った。東側調査区では同28日から遺構検出を始め、12月8日に遺構掘削を完了し、同10日に埋め戻しを行った。埋文センターは12月15日付で文化財課に現地調査完了届を提出した。

#### 3. 整理作業等の経過

出土品整理、報告書作成・刊行は事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として埋文センターが実施した。担当は特定事業調査グループである。出土品整理は平成27年度に実施し、内容は遺物の記名・分類・接合・実測・トレースおよび遺構図のトレースである。報告書原稿作成および編集・刊行は平成29年度に実施した。

第3表 調査・整理体制

	調査体制	整理体制	
業務内容	発掘調査	出土品整理	報告書原稿作成・刊行
調査・整理年度	平成26年度	平成27年度	平成29年度
調査・整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 田中 新太郎)
総括	小崎 隆司(専務理事)	柴田 政秋(専務理事)	柴田 政秋(専務理事)
事務	栗山 正文(事務局長)	釜親 利雄(事務局長)	釜親 利雄(事務局長)
	山口 登(総務グループリーダー)	長嶋 誠(総務グループリーダー)	横山 謙一(総務グループリーダー)
調査・整理	福島 正実(所長)	福島 正実(所長)	藤田 邦雄(所長)
	藤田 邦雄(調査部部长)	藤田 邦雄(調査部部长)	垣内 光次郎(調査部部长)
	川畑 誠(特定事業調査グループリーダー)	川畑 誠(特定事業調査グループリーダー)	松山 和彦(特定事業調査グループリーダー)
担当	水田 勝(特定事業調査グループ専門員)	特定事業調査グループ	特定事業調査グループ
	岩瀬 由美(特定事業調査グループ専門員)		



第9図 調査区位置図(1/2,500)

金沢市都市計画基本図を一部改変

## 第2節 遺跡の位置と歴史的環境

### 1. 地理的環境

戸水ホコダ遺跡は金沢市の犀川と大野川に挟まれた沖積平野上の沿海部に位置する。金沢市の南東部には白山から派生した奈良岳(1644m)や大門岳(1572m)が連なる。犀川は奈良岳付近を水源とし、金沢市中心部を流れる。大野川は金沢市北部にある河北潟に溜まった水が、海へ流れ込んでできた川である。

戸水ホコダ遺跡が位置する金沢市沿海部は河川が多く、水害に悩まされてきた地域である。特に大野川は河口が北へ移動する傾向があり、河口を直す改修が江戸時代には11～12年に1度行われ、安永三年(1774)には水害の根本的解決のための水路の掘削が行われた。この工事により大野川は現在の姿となった。昭和になるとコンクリートなどを用いた護岸工事、橋の架け替え、堤防のかさ上げ、川幅の拡張などが行われ、現在に至る(福田弘光1970)。



第10図 遺跡の位置

### 2. 歴史的環境

戸水ホコダ遺跡は平成3、4、8年度に金沢市教育委員会によって発掘調査が行われている。遺跡範囲が戸水町と大友町にまたがっていたため、戸水町の範囲を戸水ホコダ遺跡、大友町の範囲を大友西遺跡としているが、本来は1つの遺跡としてとらえるべきである(金沢市教育委員会1997)。なお、鞍月土地区画整理事業に伴い、平成13(2001)年以降戸水ホコダ遺跡が所在していた町名は戸水町ホから鞍月5丁目に変更されている。

戸水ホコダ遺跡が所在する金沢市鞍月地内周辺で人間の生活の痕跡が確認できるのは縄文時代からである。藤江C遺跡や近岡遺跡など低地に立地する縄文後～晩期の遺跡から遺構・遺物が検出されている。また、近岡遺跡では晩期の層からイネ花粉が検出され、縄文農耕論が提唱された。しかし、この論に否定的な意見もあり、近岡遺跡で縄文時代晩期に水稻が行われたかは現在でも評価がわかれている。

金沢市では弥生時代前期に属する遺構・遺物の検出例は少なく、市内の弥生時代の遺跡はほとんどが中期以降に属する。戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物や井戸などが検出されている。また、周辺では弥生中期中葉以降から多くの遺跡で緑色凝灰岩を用いて石製品(管玉・腕飾類など)を生産するようになる(金沢市埋蔵文化財センター2013)。戸水ホコダ遺跡周辺でも、畝田・寺中遺跡や藤江C遺跡などで石製品の未成品や施溝具が出土している。

古墳時代では、南新保C遺跡で古墳時代初頭の前方後方墳と方墳、戸水C遺跡で古墳時代前期の前方後方墳3基を含め約30基の古墳が確認されている。集落遺跡は畝田・寺中遺跡で古墳時代前期から後期の広範な集落跡が検出されている。集落規模や継続期間から、畝田・寺中遺跡一帯が古墳時代には地域の拠点的な集落だったと考えられる。

奈良時代の鞍月地内は越前国加賀郡大野郷に属する。平安時代初頭に成立した『日本霊異記』には奈

良時代の大野郷が舞台の説話があり、母親の罪を償うため息子の横江臣成人が経を写し、仏像を造る様子が書かれている。この説話から、古代の大野郷には造仏・写経が可能な階級の間人がいたことがうかがえる。古代の戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡では「伯庄」や「庄」と書かれた墨書土器が出土しており、荘園が存在していたことがうかがえる。戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡のほかにも、戸水大西遺跡で「中庄十四条七郷□」木簡、畝田・無量寺遺跡や西念・南新保遺跡で「庄」墨書土器など荘園の存在を示唆する遺物が出土している。遺物の時期は8世紀～9世紀におさまり、これらの遺跡が所在する金沢市沿海部には古代の荘園が点在していたことがわかる。中世以降も大野荘、倉月荘、富積保などの荘園・公領の存在が古文書などで確認でき、戸水ホコダ遺跡は富積保領内にあったと考えられる（金沢市史編さん委員会2004）。

戸水ホコダ遺跡周辺では荘園遺跡のほか、港関連遺跡も確認されている。畝田・寺中遺跡では、河跡や流路から「津」「津司」墨書土器、木簡（出挙木簡、郡符木簡）が出土し、河跡に沿って並ぶ建物群が検出されている。畝田・寺中遺跡の西に所在する金石本町遺跡では運河と思われる大溝（金沢市教育委員会1996）や倉庫群などが検出されており、2つの遺跡が所在する犀川河口付近には、8世紀に加賀郡津が存在していたと考えられている。

9世紀になると、国府から遠く朝廷の監視が届かないことを理由に、加賀郡が越前国からわかれ、加賀国が立国する。この頃、金沢市沿海部では大野川河口近くの戸水C遺跡で9世紀後半の大型建物や庇付建物、多量の墨書土器、施釉陶器などが検出されている。土器に書かれた文字は「依」が多く、「津」もある。大野川河口という交通の要に所在し、「津」墨書土器や施釉陶器が出土することから、9世紀以降、金石本町遺跡、畝田・寺中遺跡から戸水C遺跡へ港が移動したと思われる。また、戸水C遺跡で検出された「依」墨書土器は、大友西遺跡、戸水大西遺跡、西念・南新保遺跡、近岡遺跡などでも出土しており、遺跡間の交流がうかがわれる（金沢市埋蔵文化財センター2000）。





(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(金石、栗崎)を合成)

第11図 周辺の遺跡位置図 (S = 1/25,000)

第4表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡番号	遺跡名	時代	No.	遺跡番号	遺跡名	時代
1	137300	金石北遺跡	縄文	25	142400	南新保B遺跡	弥生
2	138400	寺中遺跡	弥生	26	142500	南新保C遺跡	弥生、古墳、古代、中世
3	138500	寺中B遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世	27	142600	南新保E遺跡	弥生、古墳、古代、中世、近世
4	138600	畝田・寺中遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世	28	142700	南新保北遺跡	弥生、古墳、中世、近世
5	138700	畝田遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世	29	142800	戸水B遺跡	弥生、古代、中世、近世
6	138800	畝田大徳川遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世	30	142900	戸水・大友遺跡	弥生、古代、中世
7	138900	畝田御台場遺跡	近世	31	143000	戸水大西遺跡	弥生、古墳、古代、中世
8	139001	畝田B遺跡	弥生、古墳、古代、中世	<b>32</b>	<b>143100</b>	<b>戸水ホコダ遺跡</b>	<b>弥生、古墳、古代、中世</b>
9	139100	畝田C遺跡	弥生、古墳、古代、中世	33	143200	大友西遺跡	弥生、古墳、古代、中世
10	139200	畝田ナベタ遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世	34	143400	戸水C遺跡・戸水C古墳群	古墳
11	139300	畝田・無量寺遺跡	弥生、古代	35	143500	大友F遺跡	弥生、古墳、古代
12	139400	無量寺C遺跡	弥生、古墳、古代、中世	36	143600	大友A遺跡	弥生、古墳、古代、中世
13	139500	無量寺D遺跡	弥生、古墳、古代、中世	37	143700	大友D遺跡	弥生、古墳、古代
14	139600	桂・寺中遺跡	弥生、古墳、古代	38	143800	大友E遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
15	139700	桂町南遺跡	弥生、古墳、古代、中世	39	143900	大友G遺跡	古墳
16	139800	桂遺跡	縄文、古墳、中世	40	144000	直江南遺跡	古代
17	139900	無量寺B遺跡	弥生	41	144100	直江ボンノシロ遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世
18	140000	無量寺遺跡	弥生、古墳、中世	42	144200	直江ニシヤ遺跡	古墳、古代
19	140100	無量寺金沢港遺跡	縄文、弥生、古墳	43	144300	直江西遺跡	弥生、古墳、古代
20	141700	藤江C遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世	44	144400	直江中遺跡	弥生、古墳、古代
21	141900	二ツ屋町遺跡	弥生、古代、中世	45	144500	直江北遺跡	縄文、弥生、古墳、古代
22	142100	西念・南新保遺跡	弥生、古墳、古代、近世	46	144600	近岡カントンボ遺跡	弥生、古墳、古代
23	142200	南新保三枚田遺跡	弥生、古墳、古代	47	144700	近岡ナカシマ遺跡	弥生、古墳、古代
24	142300	南新保D遺跡	弥生、古墳、古代	48	144900	近岡遺跡	縄文、弥生、古墳、古代、中世

## 第3節 調査の成果

### 1. 調査の概要

遺跡は金沢市外環状道路沿道の暫定緑地内の標高約2m～2.6mに立地し、南に向かって緩やかに下がる。遺構検出面は標高1.4m～1.3m前後を測る。調査区(第12図)は東西に別れ、両調査区ともグリッドを任意で設置し、西側調査区から調査を行った。西側調査区では溝や土坑を検出したが、ほとんどの遺構は攪乱である。東側調査区の検出遺構も、溝1条、土坑1基を検出したほかは攪乱である。出土遺物は表土除去・遺構検出時に須恵器、土師器、陶器、遺構から弥生土器、土師器、須恵器、陶器、木製品が出土した。

### 2. 基本層序

西側調査区のSK01・SD06に近い地点の南壁で基本層序(第13図)を観察した。第1・2層は緑地を整備する際の整地土と考えられる。第4～6層はSD06の覆土である。第3・7層は包含層や耕作土の可能性が考えられるが、詳細は不明である。地山は粘土に近い灰オリーブ色シルトを呈する。

### 3. 遺構・遺物

#### (1) 西側調査区

**SK01** (第13図) 調査区中央からやや西にある土坑である。平面形は一辺1.3～1.5mの三角形に近い。深さは約50cmを測り、掘り込みの東側は緩やかな傾斜を呈する。

**SK02** (第13図) SK01からやや南にある土坑である。平面形は一辺約2～3mの三角形に近い。南側だけが深く掘り下げられ、深さは約46cmを測る。

**SD01** 調査区北西端にある溝で、長さ3m、幅約30cm～120cmを測る。南北にのび、南に向かうにつれ幅は狭くなる。土器片が出土しているが、図化したものはない。

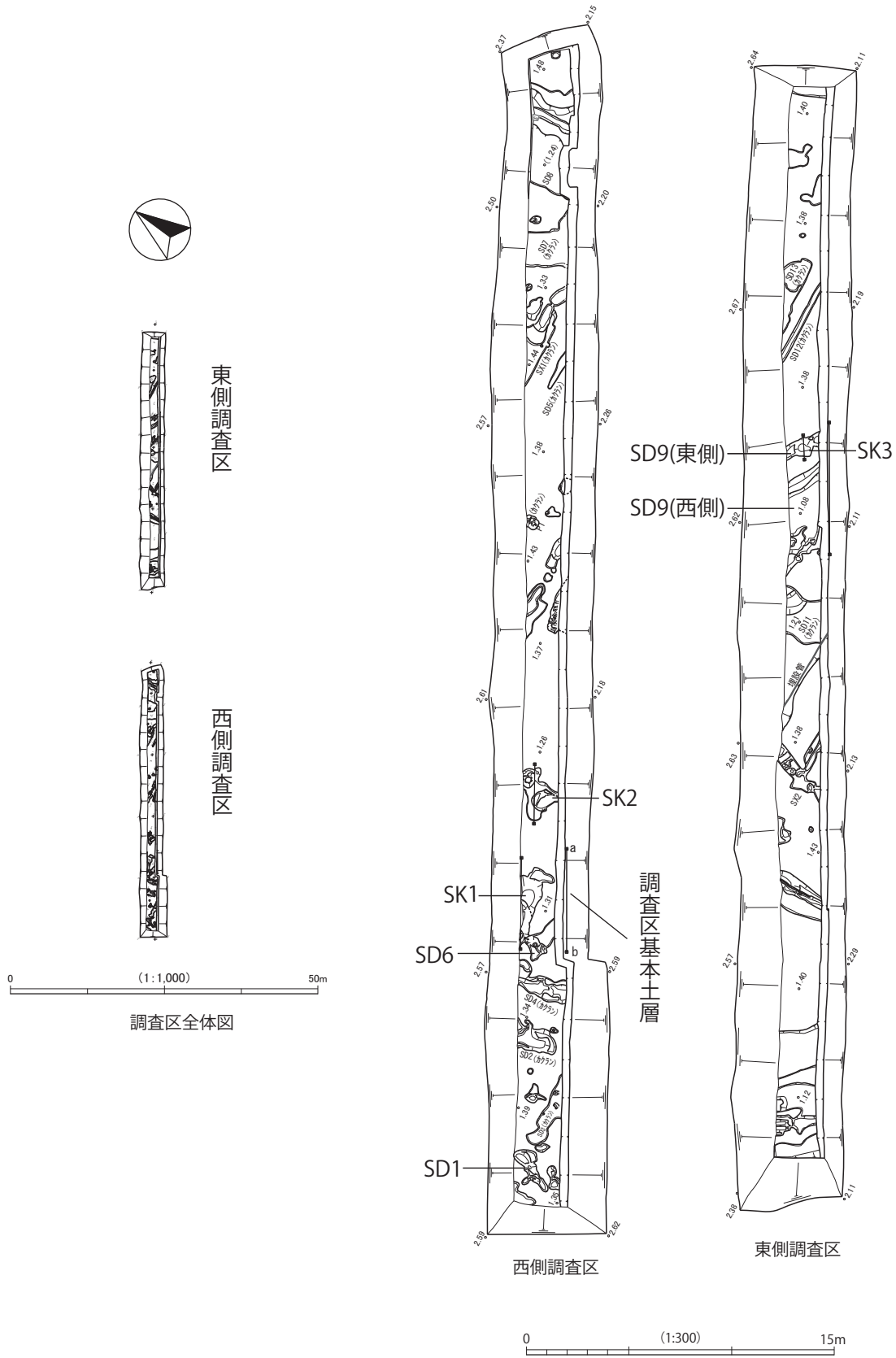
**SD06** SK01からやや南にある東西にのびる溝で、長さ約1.8m、幅約90cmを測る。全体的に浅い溝だが南西部が少しくぼむ。

#### (2) 東側調査区

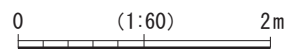
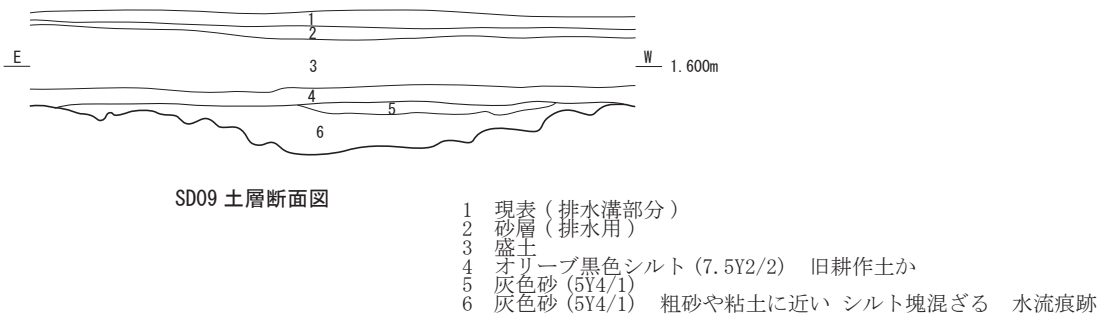
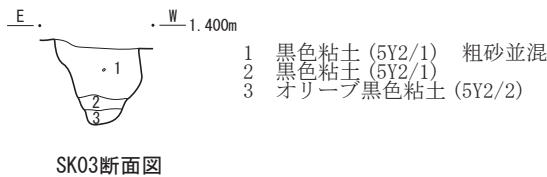
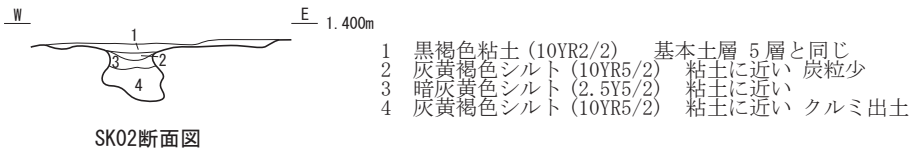
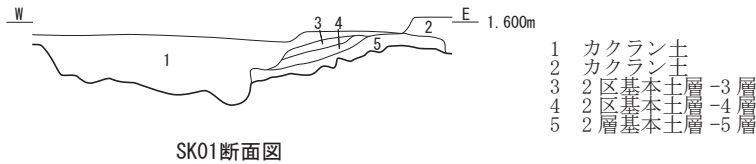
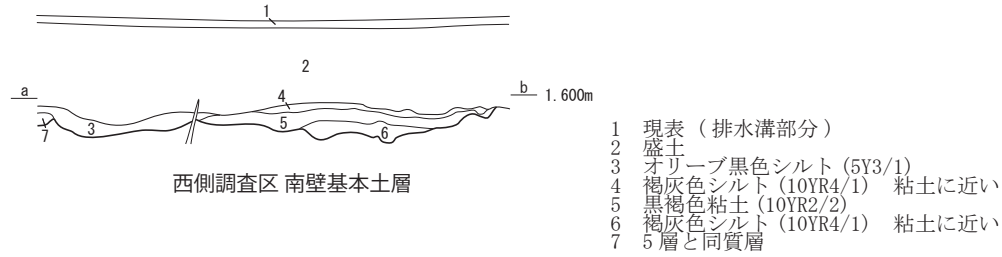
**SK03** (第13図) 調査区の中央からやや東にある土坑で、直径約70cm、深さ約60cmを測る。土師器甕片(5)、木器(木器1・2)が出土しており、図示した。

**SD09** (第13図) 調査区のほぼ中央にある北西～南東にのびる溝である。東側に高まりがあり、そこから東西に別れる。東側は幅70cm、深さ約24cmを測り、SK03によって中央部が切られる。西側は幅約4m、深さ約54cmを測る。出土遺物は西側から須恵器や陶器が出土しているほか、東西どちらから出土したかは不明だが弥生土器も出土している。これらの遺物は1～3、7～12として図示した。

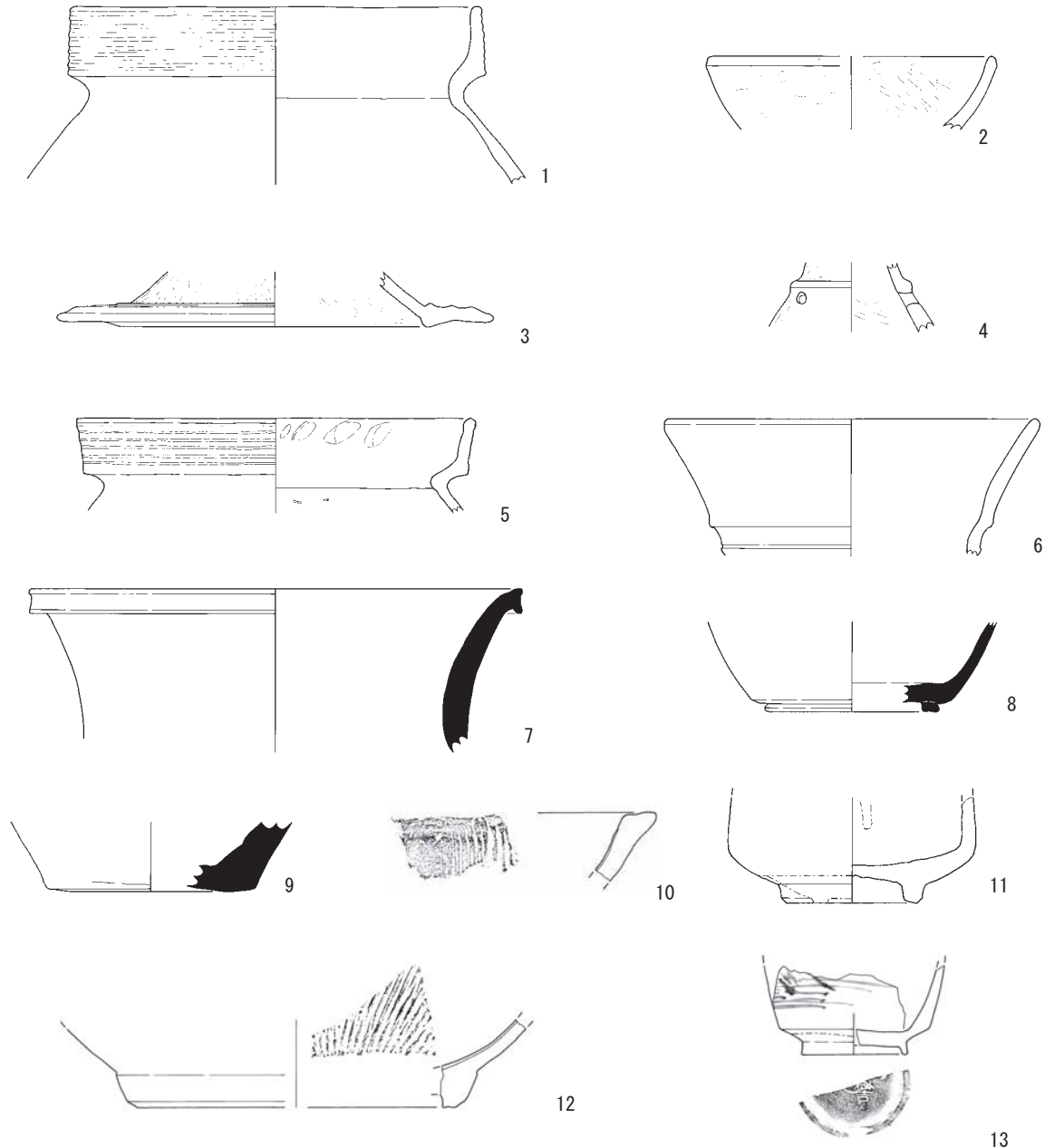




第3節 調査の成果



第13図 基本土層・遺構断面図(1/60)

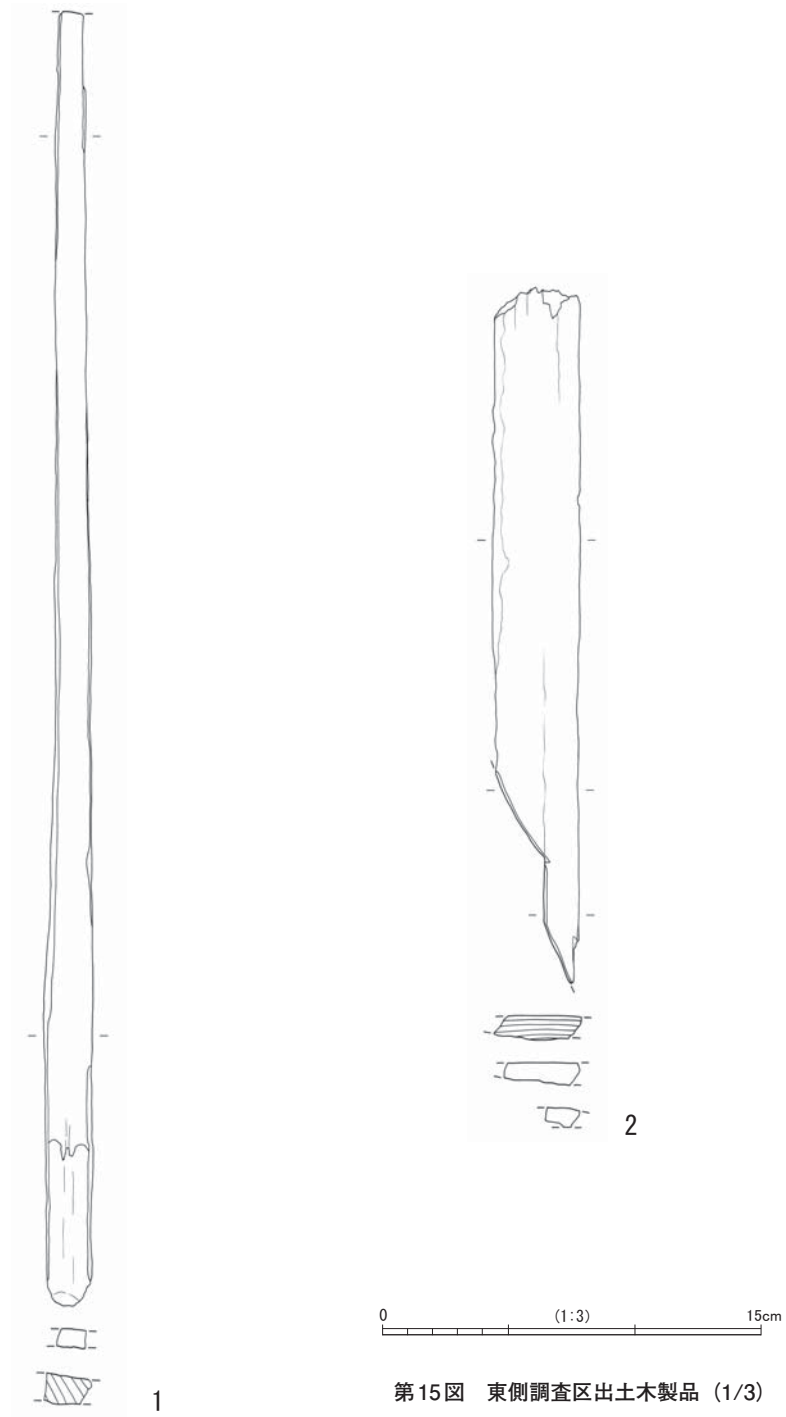


第14図 東側調査区出土遺物実測図(1/3)

第5表 出土遺物観察表

報告番号	種類	器種	遺構	調整(内)	調整(外)	色調(内)	色調(外)	胎土	備考
1	弥生土器	甕	SD09	磨耗	擬凹線、磨耗	橙	にぶい褐	粗砂多	口径(17.8) 器高(7.7) 海綿骨針
2	弥生土器	小型器台	SD09	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙、橙	粗砂少	口径(12.2) 器高(3.2)
3	弥生土器	脚	SD09	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多	底径(19.1) 器高(2.7) 海綿骨針
4	弥生土器	脚	遺構検出	ナデ	ミガキ	黒褐色	暗灰黄	粗砂少	器高(3.0) 海綿骨針
5	土師器	甕	SK3	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	粗砂少、赤色含む、雲母極わずか	口径(17.0) 器高(4.1)
6	土師器	小壺または鉢	表土除去		ヨコナデ	灰黄褐～にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂少、赤色含む、礫わずか	口径(16.0) 器高(6.0)
7	須恵器	甕	SD09(西側)	ロクロナデ	ロクロナデ、ヨコナデ	灰白～白	灰白～白	粗砂少、礫わずかに含む	口径(21.3) 器高(7.2)
8	須恵器	有台坏	SD09(西側)	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	灰白	灰	粗砂少	底径(7.3) 器高(3.9)
9	須恵器		SD09(西側)	ナデ	ヨコナデ、ナデ	灰	灰	粗砂少、1～3mmの礫少し含む	底径(6.5) 器高(2.8)
10	陶器(越前焼)	すり鉢	SD09(西側)			にぶい橙	にぶい橙	粗砂少	器高(3.0)
11	陶器(肥前)	香炉	SD09(西側)			褐色	側面は灰オリーブ、底部は褐色	砂粒わずかに含む、硬質、灰白	底径(5.7) 器高(4.6) 外部は灰釉、内部・底部は鉄釉
12	陶器(肥前)	すり鉢	SD09(西側)			灰褐	灰褐	粗砂少、素地はにぶい橙	底径(14.0) 器高(3.8)
13	陶器(京焼)	碗	遺構検出					素地は灰白	底径(4.6) 器高(3.9) 釉薬は透明、鉄絵

(遺物法量の単位はcm)



第15図 東側調査区出土木製品 (1/3)

第6表 出土木製品観察表

報告番号	器種	遺構	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
1	不明	SK3	56.8	(1.9)	1.4	
2	不明	SK3	27.8	(3.5)	1.15	

## 第4節 ま と め

戸水ホコダ遺跡と大友西遺跡の過去の発掘調査では、主に弥生時代後期～古墳時代前期、平安前期の遺構・遺物を検出している。戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡の遺構の変遷を見ると、弥生時代後期から古墳時代前期の掘立柱建物40棟や平地式建物6棟、井戸、溝などを検出しており、この頃集落が形成されていたことがうかがえる。平地式建物はいずれも柱穴を確認できなかったが、掘立柱建物群と近接し、井戸が存在することから、建物と判断している（金沢市埋蔵文化財センター 2002）。その後、空白期間を経て9世紀前半に戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡の両遺跡範囲内に分散して造られた掘立柱建物群や井戸、溝などを検出する。出土遺物に「伯庄」や「館」、「依」などの墨書土器が多量にあるため、荘園が存在していたと考えられるが、倉庫跡と思われる建物跡は1棟のみで、調査範囲外に存在する可能性がある（金沢市埋蔵文化財センター 2002）。9世紀後半になると遺構や遺物は減少し、遺跡は途絶える。11～12世紀になると掘立柱建物や井戸、区画溝などが検出され、再び集落が作られる。

今回の調査では建物跡や荘園の存在をうかがわせる遺物などは検出されなかったが、SD09は過去の調査で検出された弥生時代後期～古墳時代前期のSD21（金沢市埋蔵文化財センター 1999）もしくは、近世または近代のSD127・SD131（金沢市埋蔵文化財センター 1999）と接続する可能性がある。SD21は戸水ホコダ遺跡と大友西遺跡にまたがる大溝である。大友西遺跡の南東端から戸水ホコダ遺跡へ蛇行しながら西へ走り、全長は約500m、幅は平均250cmを測る。SD21の出土遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が主体だが、縄文後晩期や弥生中期の遺物も少量出土している。SD127は戸水ホコダ遺跡のA区を南東から北西へ走る溝である。溝中央付近に堰が作られている。SD131はSD127の堰付近から分岐した小溝である。SD127からは磁器の皿・茶碗・花瓶やすり鉢、土玉が、SD131からはすり鉢が出土している。SD09では弥生土器が数点出土しているが、陶器が主であるため、SD127・131とつながる可能性が高いと考えられる。今回の発掘調査は調査範囲が狭く、新たな資料の増加はなかったが、戸水ホコダ遺跡・大友西遺跡は未調査の部分が残っており、将来的に全容が解明されることが期待される。

### 引用・参考文献

- 金沢市教育委員会 1996 『金石本町遺跡』
- 金沢市教育委員会 1997 『戸水遺跡群』
- 金沢市史編さん委員会 2004 『金沢市史通史編1 原始・古代・中世』 金沢市
- 金沢市埋蔵文化財センター 1999 『戸水ホコダ遺跡』
- 金沢市埋蔵文化財センター 2000 『戸水大西遺跡Ⅰ』
- 金沢市埋蔵文化財センター 2002 『大友西遺跡Ⅱ（本文編）』
- 金沢市埋蔵文化財センター 2013 『畝田・寺中遺跡Ⅷ』
- 福田弘光 1970 『大徳郷土史』 大徳公民館







末松遺跡（手前）・末松信濃館跡（奥枠内）（南から）



末松遺跡群を望む（枠内が末松信濃館）





調査前（東から）



表土除去作業（西から）



遺構検出状況 西半部（西から）



作業状況（西から）



遺構完掘状況 西半部（西から）





遺構検出状況 東半部（西から）



遺構完掘状況 東半部（西から）



P01 土層断面（南から）



P03 土層断面（南から）



遺構完掘状況 東半部（東から）





SD01 土層断面 (南から)



SD01 遺構完掘状況 (南東から)



南壁土層断面 基本土層 1 (北から)



南壁土層断面 基本土層 2 (北から)



1



2



3

1. 表土除去 2. 包含層 3. 遺構検出

出土遺物





西側調査区調査前状況（南西から）



西側調査区表土除去終了状況（南西から）



西側調査区遺構検出状況（南西から）



西側調査区調査風景



西側調査区基本土層（北西から）



SK01 土層断面（南東から）



SK01・SD06 完掘状況（南西から）



SD01 完掘状況（南西から）





SK02 土層断面 (南から)



SK02 完掘状況 (南東から)



西側調査区完掘状況 (北東から)



東側調査区調査前状況 (北東から)



東側調査区表土除去終了 (南西から)



東側調査区検出状況 (北東から)



東側調査区調査風景



SD09 土層断面 (北西から)





SD09 遺物出土状況



SD09 遺物出土状況



SK03 土層断面 (北西から)



SK03 完掘状況 (北西から)



SD09・SK03 完掘状況 (西から)



東側調査区積雪状況



東側調査区除雪作業風景



東側調査区完掘状況 (北東から)





# 報告書抄録

ふりがな	ののいちし すえまつしなのやかたあと かなざわし とみずほこだいせき							
書名	野々市市 末松信濃館跡 金沢市 戸水ホコダ遺跡							
副書名	石川県水道用水供給事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	加藤江莉、佐々木華子							
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL 076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2018年3月23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 (新)	東経 (新)	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
すえまつしなのやかたあと 末松信濃館跡	いしかわけん 石川県 ののいちし 野々市市 きよかねいっちようめ 清金1丁目	17212	1204500	36度 30分 30秒	136度 35分 59秒	20151201 ～ 20151221	120㎡	記録保存 調査
とみず 戸水ホコダ いせき 遺跡	いしかわけん 石川県 かなざわし 金沢市 くろつぎごちようめ 鞍月5丁目	17201	143100	36度 36分 4秒	136度 37分 22秒	20141111 ～ 20141215	240㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
末松信濃館跡	集落	古代	溝、ピット	土師器、須恵器				
戸水ホコダ 遺跡	集落跡	弥生、古墳、 近世	溝、土坑	弥生土器、土師器、 陶器、木器				
要約	<p>末松信濃館跡は、古代の集落で溝とピットを確認した。さらに、検出された鞍部は、西側に展開する清金アガトウ遺跡と本遺跡を隔てる地形の痕跡である可能性が高い。かつて濠があったと伝承が残るが、今回の調査では検出されなかった。</p> <p>戸水ホコダ遺跡は弥生時代～古墳時代前期の集落である。今回の調査では溝や土坑を確認した。確認した溝のうち、SD09は過去に金沢市教育委員会が調査した際に検出した溝とつながる可能性がある。戸水ホコダ遺跡の範囲には古代の荘園が存在するが、本調査では荘園に関連する遺構・遺物の確認はできなかった。</p>							

## 野々市市 末松信濃館跡 金沢市 戸水ホコダ遺跡

発行日 平成30(2018)年3月23日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

電話 076-225-1842 (文化財課)

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 ハクイ印刷